

## 研究者たるもの ～定年退職後の活動報告を兼ねて～

浅井 春夫  
(立教大学名誉教授)

はじめに—信念をもつということ—

2017年3月に、1998年から19年務めた立教大学を定年退職し、大学での研究者生活を終えて、もう3年半が過ぎようとしている。そして今はコロナ禍の真ただち中にある。

ここで書いている内容はエッセイ風にいまの私の想いを書いたものである。エッセイ風というのは、自由な形式で意見・感想などを述べた散文のことである。研究論文は、起承転結、課題設定と結論の間には論証過程があるのが基本的な形式であるが、エッセイは問題意識と結論を思うままに論じた評論（物事の価値・善悪・優劣などを批評し論じること）である。『まなびあい』第13号の執筆申請書を提出したのが6月13日で、それ以来、考えたこと、気になっていること、反省すべきことなどを日々思いつくままに整理しまとめたものである。

タイトルの「～たるもの」の前には何らかの職業や立場の名称が接続され、「～するべき」「～してはいけない」などと呼応することで、職業や立場に対して、あるべき姿を問う表現となる。

これまで『まなびあい』で自由に書かせていただいたが、13号ではそれらの延長線上に書いた備忘録（記憶すべき事柄を簡単にメモするための個人的な雑記帳）のような文章である。率直にこれまで考え感じてきたことを書いてみたいと思っている。

結論じみたことをここで書いておくと、研究は何のために、何を明らかにしたいのか、もっといえば、どのような現実に関心をもち、どこに問題があるのかを探求し、何ができるのかを追究していくところに研究者の問題意識が反映しているのだと思う。

研究者に問われる究極の誠実さとは何かを考えると、信念に基づいて研究と社会的行動を貫く努力をするかどうかである。その点を避けて研究を続けることは

できないのではないかと思う。

信念とは、国語辞典の説明ではなく、自分自身の説明と理解ではどのように言うことができるのであろうか。それは自分に問い続けている目標であり、行動と価値観の根底にある考え方といえよう。

## 1. コミ福の草創期を想う

1998年4月に開設されたコミュニティ福祉学部が集まった先生方は、本当に魅力的で個性的な方々であった。社会福祉学や政策学の専門家だけでなく、宗教学、スポーツ学、語学分野の有名な方々が集まっていた。いろいろなところで「○○先生はお元気ですか」「○○先生の本から多くのことを学ばせてもらっています」などの声かけをいただいたものである。

学部開設の初年度は合格基準を設定するのは前例がないので難しく、予想より多くの入学者に恵まれた。新入生もまたユニークで魅力的な学生であふれていた。

教授会もそれぞれが自由に発言をし、名実ともに忌憚のない発言が行き交っていた。付度など微塵もない教授会であった。関正勝初代学部長のご苦勞はいかほどであったかと思う。関先生の運営能力とお人柄もあって、どの先生も学生たちと学部のために努力をされていた。これまでの私のいくつもの職場・活動領域での体験から学んだことは、権力志向と私利私欲が幅を利かせるようになると清新な雰囲気は崩れていくという現実であった。

一方、若手教員である私は、初年度は1年生しかいないのでキャンパスも、授業も、会議も本当にゆったりとしていて、こんなにいい条件でしごとができるなんて！と感じていたのだが、そんな期間は2年間で終わっていた。

1年生の「基礎演習」は確か20人クラスで、教員ふたりで担当をして授業に臨んでいた。私は文学部から移籍された鈴木範久先生（宗教史学者で、近代日本キリスト教を研究、とくに内村鑑三研究で高名な方である）とご一緒させていただいた。先生は入学式の教員あいさつで、新入生に「いま正門の桜がひらひらと散っていますが、人生はそんなものです」と語られた人である。いまは枯れてしまった桜の木を想うとき、その言葉を思い出す。

実習先訪問は、実習生はまだいないなかで、複数の教員で福祉施設や関係機関を回ったが、福祉プロパーではない教員との訪問は思わぬ気づきと学びの体験であった。語学の教員である小林悦雄先生と一緒に児童養護施設に実習訪問に行った際に、施設見学をしている間中、子どもたちがずっと手を握って回ってくれた。帰る際に、私は手を放すタイミングに躊躇はなかったが、小林先生は「どこで、どんなことばを伝えて、手を離せばいいのか、迷ってしまいました」と言われていた。

開設初年度であったが、新座キャンパス学園祭を開催しようということになり

実行委員会を結成して論議をした。学生・教員・職員の3者の構成であった。名称は学生たちが「IVYフェスタ」と決定した。いくら何でも実行委員長を1年生にお願いするのは申し訳ないので、教員の私が第1回新座キャンパス学園祭実行委員長となった。副実行委員長は、現在ジャーナリストとしてご活躍の常井健一さんが学生代表で重責を担っていた。当然のことだが大学・学部では新座キャンパスの学園祭の予算は計上していないので、学園祭費用は教職員からのカンパと学生たちが学園祭パンフへの広告掲載代を地域の方々をお願いしてまかされた。「コミュニティ」を冠した学部名の第一歩を踏み出した。事務部の大山さん、山下さんをはじめ職員の方々も一丸となって取り組んでいただいた。当日の警備なども教職員で対応し、後夜祭ではその後に恒例となった打ち上げ花火で地域の方々を眺めて、無事に終了。花火が終わると、何人もの男子学生が5号館前の池に飛び込んで、喜びを発散していた。

学部はじめての懇親会はキャンパス正門から1分の寿司屋さんの2階で開かれ、私は司会を担当した。みんなが大笑いをしながら、楽しい懇親会であった。あれから23年もたったのだなあ。98年度は思い出がいっぱい詰まった1年であった。

さまざまな組織で構成員がこの職場でやっていこうと思うために大事なことは“支えられている感”である。分断と排除は、組織発展の原動力である多様性と協同の思想を踏みにじる。分断と排除はトランプ現象だけの問題ではない。「分断と排除」「多様性と協同」は身近な思想である。コミ福のよき伝統をいまでも胸に抱き続けたい。

## 2. さまざまな研究者の姿から考える

### 信念を持たない職業的研究者

6月28日のNHKテレビで、為末大さん（スポーツコメンテーター、指導者）が次のような発言をされていた。スポーツ選手のなかには、勝ちたいために競技する選手と、もう一方で何かを言うために勝ちたい選手がいるというコメントであった。そうか、国際的にみれば、スポーツ選手においてもそういう分岐点があるのかと。わが国におけるスポーツ関係者の社会問題認識が問われなければならないことばである。

ときどき大学院生や大学院進学を希望する学生と接する機会があり、「大学院に入って何をしたいのですか」と率直に質問すると、「研究者になりたいんです！」と明言されることが少なくない。それで「どうして研究者になりたいのですか？研究者になって何をしたいのですか？」と重ねて尋ねると、途端にその明快さが不安定になる人が多くなる。

ただ研究者をめざす若い人たちが研究という営みに何らかの魅力を感じている

ことが大切なことであると思っている。研究者になる入り口は多様であっていいと思う。真理を徹底して探求するその結果として、“社会で役立つ研究”になっていくのだと思う。

どんな研究者になりたい?!

研究者であればなおさら何かを主張したいがために研究し、その言いたいことに確信し証明するための手段として、研究を続け、書くという道筋がある。しかし、実際の研究者はどうであろうか。大学等を中心にした職業的研究者に目を向けると、この時代を生きる人間として、研究専門職として何をこの社会に訴え、変革していこうとしているのかが問われているはずである。それなのに政治問題に対する判断をしないことが「中立的」で誠実な態度のように考える研究者がいるが、私はそうした態度には与しないできた。

私などは、「あの人は左翼だ、共産党だ」などと陰で言われてきたが、そうした政治的スタンスを私は隠したことはない。少なくとも私は右翼ではない！選挙の際に応援メッセージが欲しいと言われれば、日本共産党の候補者パンフに掲載される文書を実名で送ってきた。また立候補者と雑誌で対談もしてきた。自分の信念に基づいて行動をしてきたつもりである。後ろ指をさしたり、陰口を言ったりする人には何も言うことはない。前から指をさされ、堂々と批判をされ、その主張に納得がいかない場合には、毅然と反論し議論をしたいと思うのだが、そんなことはこれまではなかった。

「汝の道を行け、しかし、あとは人の語るに任せよ」（カール・マルクス）を、何度も読んだ本の片隅に書いてきた。

研究者の地位を獲得することが自己目的のような研究者もいる。そのために高名な研究者のもとに集まる人もいる。その指導的、リーダー的存在の研究者の理論と研究的姿勢に魅力を感じているのかではなく、研究業績をあげるための原稿執筆、発表機会の確保に魅入られて集まる人もいる。それもまたその研究者たるものの生き方である。

### 3. 研究者であることの要件

#### 研究者たるものの自己存在証明

研究者には、“書く勇氣”が問われる。勇氣とは、アドラー流に言えば、“嫌われる勇氣”でもある。自分が掴んだ課題に、真摯に研究を続け、必要と思うことを言う。それで排除され、嫌われることがあっても、信念はそんな苦境にも立ち向かう勇氣なのだと思う。

研究者であることの最低要件と私が考えることは、①研究をし、その内容を発表し続けていること—この大前提を放棄しているのは研究者の怠慢である、②マ

イノリティとなること、排除の対象となることに臆することがないこと—付度（先回りした服従）とは無縁であること、③権力や多数派に抗う勇氣を持っていること、そして自らの誤りに対して謙虚であることなどである。これらは比較的嫌われやすい姿勢である。私などは一貫して嫌われ者だったと思うけれど、誰にどのような理由で嫌われているのが問題だと思ってきた。正直なところ“嫌われる名誉”を感じてきた。身近な人から「ポジティブ～（^^） /」とよく言われる。

いつの頃からだろうか。たぶん小学校高学年くらいか中学生になったときだったか、漠然と私の人生は人生後半からよくなるのだと思うようになっていた。父母の離婚で、祖母と2人で暮らすようになっていた小学校3年生のアルバムは暗い顔をしていた。だがその祖母との暮らしが私自身にとっては幸運であった。そうした状況から自らの未来を楽観的に考えた“根拠”は、生年月日と名前であった。漢数字で書くと、昭和二六年八月八日生まれで、まったくの末広がりであることと、名前がこれまた「浅井」は何かと障壁があるがそれでも末は何とか広がっている。「春夫」はまさに末広がりなので、絶対に人生後半はいいことがいっぱいあると思ってきた。信じてきたわけではないがなんとなくの思い込みは、人生にポジティブな影響を与えるものである。けっこう人間は単純なのかもしれない。いや、それは私だけか!?

## 何を見つめて生きるか

8月に、大学時代からの友人である水野喜代志さんから『遠く地平をみつめて』（非売品、2020年、愛媛民報社発行）が送られてきた。彼の人柄がにじみ出ていて、さすが我が同志と感じるところが多くあった。水野さんは、龍谷大学の学生寮で、私が3年生の時に、入寮し同室で暮らした仲間だ。彼は大学を卒業して、私の後を追うように、日本福祉大学に編入し、卒業後は郷里の松山で特別養護老人ホームに勤務、その後、専門学校、松山東雲短期大学教員として定年退職を迎え、現在、共同作業所の所長をしている。特養でしごとをしていた時に、入居者の方と一緒にお風呂に入っていたことを彼から聴いていた。ホームでも、県内でもそういう職員はいないと言われたそうだ。

この冊子のあとがきで「愛媛県は保守的だと断言する人もいます。しかし私は立身出世を夢見て中央をめざす人より、地方で積極的に弱者救済を行っている人々に限らない愛情と尊敬の念を抱いています。平和の問題、人権の問題などに対しても、この地で努力している人々と連帯したいと思います」（115頁）という文章にはぐっとくるものがあつた。彼の揺るがぬスタンスであり、生き方なんだと…。友を誇らしく思う。

研究者のなかには、「立身出世を夢見て中央をめざす人」もいれば、権力を持ちたい、あるいは権力に阿る（おもねる：人の気に入るように振る舞うこと）人

も少なくないが、研究は何のために、誰のために、何をしたいのかが根本のところまで問われている。その研究の原点のところ、立場が違ふと感じる研究者および研究者をめざす人も少なくない。

私と政治的立場や理論的立場や考え方がちがうことで、その人の評価を変えようとは思っていない。でも、研究をすすめる根本の思想（行動や態度を導く源泉）を持たない、持とうとしない人に、私は敬意を持ってないのである。

水野さんの地元で、愛媛大学教育学部附属中学校内にある、松山高等学校同窓会が建立した俳人・中村草田男の文案による碑がある。私が生きた学生時代には、これからの人生の本史を生きるうえで貴重な体験が数多くあった。とくに寮生活は多くの出会いと学びの日々であった。この碑文を心に刻む。

「青春、友情、希望——ここに存在せし一切のものの不滅を信ず」

#### 4. 研究者としての自己形成

##### どんな立場・地位でも貫ける自己であるために

“立場・地位が人を規定する”とよく言われることがある。さまざまな団体などに関わる中でその言葉を実感することがよくある。亡き父（戦時中には毒ガス製造の特命作業をしていた瀬戸内に浮かぶ大久野島に徴用され、シベリア抑留で終戦を迎える）は、実家に帰るたびに、私と夜遅くまで酒を飲みながら話することを楽しみにしていた。その話のなかでどんな会社組織や運動団体においても、上の立場に立つことで、あるいはその組織で年長になっていくことで、その人の人となり（その人の人間性や、性格・性質）や、他者とのかかわり方、さらに組織運営における姿勢や方法が変わってくることを、自らの経験を踏まえて語っていた。かなり繰り返し話された記憶がある。それは私が研究者になってから、何度も話されたような気がする。

人は、自分がある人を嫌いな分だけ、その人も私のことが嫌いなんだということも、人間関係を考えるうえで意識してきたことである。その人を好きな程度に応じて、相手も私のことを同じ程度に好きでいてくれるのだと思う。

ただし！恋愛関係ではそうはいかないと思っておいたほうがいい。自分がこんなに思っているのだから、相手も思ってくれているという思い込みは絶対にしないように！

##### 研究者の専門性とは

研究者における自己形成は、研究課題と目的意識があって形成される自分づくりのプロセスだが、それは事実と現実はどう向き合うか、ときにはいかに抗うかによって形成される自己像であることが多い。

かなり単純化していえば、医師の専門性とは、患者の身体的精神的な病などに対して、治療を通してその軽減・緩和・改善、健康の回復を具体化するところにある。教師の専門性は、子ども・青年・人間の学びを促し、人格の形成と完成をめざすところにある。それは教育基本法第1条（教育の目的）で「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」と、注釈の必要な条文ではあるが規定されている。また福祉実践者の専門性は、福祉利用者の生活困難を軽減・緩和・改善することであり、その保護・援助・支援を通して当事者のエンパワーメントの課題への取り組みが求められるということになる。

では「研究者たるもの」の専門性とは何であろうか。

それは研究することに心からの喜びと楽しみを感じていることが前提である。それは研究の課題・対象・方法を通して自らが学び続けることに、根本のところでは人間的な喜びと楽しみを感じていることである。好きなことをやっていれば、人間はブレることはない。

専門性を最大公約数的に定義すれば、それぞれの領域の局面に対する判断と対応能力ということが出来る。研究者それぞれが、この時代とこの人間世界の課題に対して、どのような判断をして、どのように立ち向かおうとしているのか、それぞれの研究者が自らの専門性を顧みることが必要な時代ではなかろうか。

研究者のなかでも、私から見ると芯がブレる人がいるが、それは信念を持ちきれていないことの反映であると思っている。より直接的な言い方をすれば、研究そのものを好きではない、研究そのものを愛していない人ではないかと思う。論稿をほとんど書かない研究者も少なくないが、そういう人は研究活動、その背景にいる人間が好きではないのだと思う。だから自主的に本を企画・編集・出版することもない。それは学び続けることへの喜びを体得していない人であると思っている。

よく大学教育が即戦力養成課程であったり、大学教員が研究もしないで実習中心指導の教員になっていたりする状況を、大学が「専門学校化」していると言われることがあるが、それは専門学校に対して失礼な評価である。専門学校においても教員は研究者でなければ、本物の現場人を養成することはできない。研究することに不誠実である教員は、教えることにおいてもまた不誠実であると言わざるをえない。真摯な自己点検が研究者には求められているのである。

## “テレビっ子（爺）”であることの自己擁護

私は家にいるほとんどの時間はパソコンの前にいる。現在のように自粛生活が要請される期間は、その時間はもっと多くなっている。パソコンに向かうときは、必ずテレビをつけている。それはいつ頃からだろうか。大学院時代からだとする

と、33年間は本を読みながらテレビをつけている時期、30年近い期間はパソコンとテレビを両方つけて、しごとをしていたことになる。テレビなど見ない研究者も多いが、たぶん私は最も多くの時間、テレビをつけている研究者であろう。これはけっして自慢ではない。

テレビは社会で行き交う情報をリアルタイムで知ることができる。ただマスコミの情報は断片的で恣意的誘導的な内容が多くなっていることも否めない。私などは、NHKやEテレ、民放のドキュメンタリー、ドラマなどもよくつけている。朝、まずは新聞を読んだあとのルーティーンは、テレビ欄のチェックをして、どういう順番で番組を見るのかを決めることにしている。外出するときは、録画予約をして出ることもある。

今日（8月10日）の番組欄では、必見の番組は、「エール<sup>囀</sup>」は、朝とりあえずは観て、昼間はニュース、ドラマなどをはしごする。夕食後は、午後8時から30分はEテレのハートネットTVで「戦時ドイツと現代日本 命を選別する政策」、9時からNHKアファンの森よ永遠に—「CWニコルからのメッセージ 森の魔法とは多様性こそ可能性だ!」、10:25には再びEテレで100分de名著—「モモ時間どろぼうにこめたエンデの時間論」、そして11:45からNHKバリバラ—「激論! 黒人差別の現実」、その後にはすでにはじまっている日テレの夜ふかし 村上マツコの「若者のキス離れを調査」を見て、ほぼ1時になる。またNHKに戻って「世界はほしいモノにあふれている<sup>囀</sup>」で三浦春馬&JUJUの番組へ（一人ひとりの人間の使命とは、自らの命を使い切ることなのに…）。毎週楽しみに見ていたのだが…。こんな感じで、パソコンと本に向き合いながら、テレビをつけている。必ずしも集中して見ているわけではないが、ときには内容をメモすることも少なくない。学びや研究のヒントは、テレビの中にもあると思っている。少なくとも私にとっては研究意欲を継続するうえで意味のある情報源のひとつでもある。

研究をするうえで、映像を見て学ぶことや当事者の語りを聴くことで学ぶことに刺激を得ている。正直なところ、テレビを見ながら泣くことも多い。いま取り組んでいる戦争孤児問題を多くの人に知ってもらい、とりくみを広げていくために、文章だけではなく、映像や写真、絵、できれば音響も交えて記憶の継承をしていくことも重要な課題ではないかと考えている。

「戦争を怖いと思えばやりたくない。怖いというのは記録や知識や情報ではない。やむにやまれる感情です。怖いからやめようよ。これは感情なのです。……感情を殺さぬために、われわれは直接体験していないことを追体験する想像力を高め、先人の記憶を模倣していかなくてはなりません。なぞって体験したつもりになる。これが大事なのです。……本当の体験ではないから、間違いも増えます。それでも殊に（ことに—とりわけの意味—浅井）戦争や災害については、なるべく記憶を記録に切り下げてはいけない。大空襲や玉砕や被爆に生きた感情が動か

なくてはいけない」(片山杜秀「太平洋戦争を語り継ぐとは?」『時空旅人』特集：太平洋戦争の足跡をゆく、Vol.57、2020年9月、25頁)のだと思う。

感情をともなう記憶の重要性を今後の戦争孤児研究のなかでも考えてみたいし、具体化しなければならないと考えている。いま私が考えているのは、子ども向けに、戦争孤児の物語を絵本にしたいと考えている。戦争孤児問題に関して、あらゆる表現と伝達の手段を活用して取り組みたいと思っている。

ただ、テレビをつけなくて、パソコンや読書に集中すればもっと能率がよかったかもしれないと思うけれど、これぞ！私の研究のやり方なんだと納得をしている。この私流は変わらないであろう。ちなみに、例に挙げるのもおこがましいのだが、マンガ家の手塚治虫は絵を描きながら、テレビをずっとつけてしごとをされていたとのことである。テレビからのヒントも少なくなかったようである。問題はどのような情報をセレクトし積極的に学ぼうとするのか、そしてメディア・リテラシーのスタンスをしっかりと持つことが求められている。

私が“ながら族”となったのは、ちょうど高3の大学受験の時期で、小さなラジオで深夜の大学受験ラジオ講座を聴いていることを知った父が、私の部屋によく聞こえるラジオをそっと置いていつてくれたときからである。それ以来、私はラジオを聴きながら本を読む生活になっていた。それがテレビに変わっていったのだった。

## 5. 2020年の研究報告とこれからの研究課題

### 2020年の出版報告

今年はいくつかの研究計画に基づいた出版がたまたまこの1年に集中することになった。定年退職後の研究会の成果の発表や連載原稿などのまとめが、結果的に出版が集中することとなった。その他に、雑誌の連載や執筆論稿、座談会、学会誌の執筆など、正直なところ今年はいくつか、パソコンを打ち続けて、校正作業をする生活である。外出して、講演や会議への参加は少なくなったが、その分Zoomを使ったりリモート会議が頻繁に入ってきている。

以下、2020年度内に出版した(予定も含めて)書籍を紹介しておくことにする。これは研究職をリタイアしたとしても、研究者としての研究活動は継続しているという定年退職後の活動報告でもある。

- ・浅井春夫・良香織監修『親子で話そう！性教育』朝日新聞出版、2020年6月
- ・ロビー・H. ハリス著、イラスト：マイケル・エンバーリー、上田勢子訳、浅井春夫・良香織監修『コウノトリがはこんだんじゃないよ！』子どもの未来社、2020年7月
- ・共編著『戦争孤児たちの戦後史(全3巻)』第1巻 浅井春夫・川満彰編『総論編』吉川弘文館、2020年8月

- ・同第3巻 浅井春夫・水野喜代志編『東日本・満洲編』12月刊行予定
- ・ユネスコ編、浅井春夫・艮香織・田代美江子・福田和子・渡辺大輔訳『改訂版 国際セクシュアリティ教育ガイダンス』明石書店、2020年8月
- ・単著『幼児・学童の性—30のQ&A』エイデル研究所、2020年10月
- ・単著『子どもの未来図』自治体研究社、2020年10月
- ・単著『包括的性教育』大月書店、2020年10月
- ・浅井春夫・艮香織・酒本知美監修『愛児の家 史料集成』第1巻、第2巻、2020年11月
- ・浅井春夫・安達倭雅子・艮香織・北山ひと美編、性教協・乳幼児の性と性教育サークル著『乳幼児の性と性教育ハンドブック』かもがわ出版、2020年12月刊行予定
- ・その他、分担執筆で、子どもの権利条約市民・NGOの会編『国連子どもの権利条約と日本の子ども期—第4・5回最終所見を読み解く—』（第13章『「家庭を強化する」ために求められるもの」を執筆）本の泉社、2020年7月

## 2021年およびその後の研究計画

以下は研究計画である。どこまでできるのかは心もとないが、目標がなければ研究は自然発生的にはすすまないものである。研究の出発点にはその課題とテーマに足を踏み込む決意が必要である。決意とは自らの意志をはっきりと決めることであり、研究にかかわっていえば、自らが握って手離さない課題と正面から向きあうことであろう。その意味で研究はまずは自分のために取り組む真摯な活動であると思う。まさに決意こそ創造の母である。ここで大風呂敷を広げておくことも、研究の問題意識を拡げ保つうえで意味のあることであると思っている。21年度は今年よりは少しはゆったりとした計画ですすめたいと考えている。

- ・性教育分野では、『性の絵本（全5巻）』を現在準備中で、21年の夏休みからの刊行をめざしている。
- ・ジェンダー、性教育の研究領域でセックスワーク論が少なくない影響を与えているが、その批判的検討とともに性教育実践で「性買売」（性売行為がまずあって性買が成立するという個人的なレベルの問題ではなく、性を買う行為を前提にした斡旋・営利追求の社会構造が本質的な問題と考えて、意識的に買売としている）のテーマをいかにすすめていくのかをまとめたいと思っている。タイトルは『性買売と性教育の課題』を考えている。
- ・戦争孤児問題では、今年刊行した『戦争孤児たちの戦後史（全3巻）』を踏まえて、補完する企画として、全3巻の編者5名が編者となって『事典 太平洋戦争と子どもたち』を21年には刊行することになっている。同時並行で、何人かの有志で『シマの孤児院』『海を渡った孤児院』をまとめることをめ

ざしているが、これは数年を要する研究となろう。

戦争という動きは子どもたちから体制に巻き込んでいく。それは戦時体制においては教育という国家による訓育（知識の習得を主な目的とする「教授」に対し、意志、感情などを涵養して望ましい人格—戦時体制では軍国少年・少女—を育成することを主な目的とする教育作用）の対象となるのが子どもである。そして戦争が終わった際には、戦争にかかわった国・地域には多くの戦争孤児と障がい児が残されることになる。戦争だけは絶対に繰り返してはならない！ことを、研究者は堂々とことばにして、研究を通して発信し、戦争を食い止める行動をしなければならない使命がある。この時代の傍観者であってはならない。

- ・さらに沖縄の郷土誌『月刊 青い海:あすの沖縄をつくる若い広場』（おきなわ出版、1巻1号（1971年4月）—15巻7号（1985年9月、145号）の全号を古本屋で購入しているので、ここに登場している人々にインタビューを試みたい。この課題も時間的にギリギリの状況となっている。3年は必要になろう。本のタイトルは『「青い海」を歩く』と決めている。
- ・今後、ある程度の時間をかけて、『人性学（セクソロジー）入門』、『子どもの性的発達論入門』、『社会的養護の新たな展開』（はじめて研究書として1987年に出版した本の題名は『児童養護の新たな展開』であったので、現在の時点で施設養護と里親制度の相互発展的な方向を提起したいと考えている）…、さらに夢は広がっていくがこの程度にしておこう。

でも「夢は目標よりも可能性が大きいのです」（横山充男『万人の父になる—佐竹音次郎物語』浅井春夫〔解説〕「夢に挑戦する人生を生きる」学研プラス、2019年、171頁）。

## まとめにかえて—卒業生のみなさんへのエール—

いま、あらためて思う。コミ福が創設されて多くの教員が尽力をされてきたが、亡くなった方は、尾崎新さんと森本佳樹さんである。お二人とも信念の人であった。自らの信念に基づいて生きた人であった。そして共通するところは、“弱き（立場に置かれた）人々”への眼差しであり、“弱き人々”をないがしろにする者たちへの心からの怒りである。このことはコミ福の魂ではないかと思う。

卒業生のみなさんは、社会人として多くの困難にも直面しながらも奮闘しておられることであろう。大変ないまの時期にいろいろなことを考え、立ち止まって悩むこともあろう。

みなさんへの私の願いは、自分が本気で取り組みたいことを見つけ出し、どんな大きなことであろうと、その夢に向かって挑戦してほしいということもあるが、その前に人間を大切にする、それは仲間を大切にすることであってほしいということである。「あの人はすごい！」と評価されることも貴重なことだと思うけれど、

その前に、「あの人はどんな人にも優しいね」と人柄を褒められることがあれば、こんなに尊いことはないのではないかと。社会的には高く評価される人が、自分の周りの人に対して、意図的に排除や攻撃性をあらわにする人がいるけれど、そうした人たちは自らの真実を知らずに、いや知ろうとせずに生きていくのだろうと思う。身近な暮らしのなかのプチファシズムを見ながら、私たちはプチパシフィズム（pacifism：平和主義）を大切に、分断社会のなかで平和主義を貫いて仲よく生きたいものである。

### 「まとめにかえて」の補足—ちょっと誌面に空白があったので、初校時に加筆

1998年学部開設に年に、福祉分野における新自由主義の具体的方針として「社会福祉基礎構造改革」が政策側から提示されていた。それに対して、朝日新聞の「論壇」で、この方針をすすめることによって国民生活において6点にわたって問題が顕在化することを拙稿で提起した。ある高名な大学教授は、「この内容は世論をミスリードする」と言われていたが、そのことの是非は国民生活の実際をみれば明確である。私などに対して「守旧派」（何らかの改革・革新の動きに対して、現状維持を望む勢力およびの従来への考えの側の勢力のことをいう）などという研究者もいたが、「改革」という名のもとに、どれだけの人々が貧困と社会的排除の下で暮らすことになったかに痛みを感じる感性が問われていると思う。

『まなびあい』の題字を書いていた尾崎新さんから、「社会福祉基礎講座改革の動きに対して、私なりの実践論の立場から批判したのが、『「ゆらく」ことのできるちから』（誠信書房、1999年）なんですよ」と言って、ご本をいただいたことがある。誠実に研究を追求している人のことばが心に沁みだ。

研究や運動においても少数派であっても、真理に対して忠実であることを貫けば、時間がかかっても事実と現実が、理論や運動の意味を証明すると感じている。

尾崎さんや何人かの恩師のように、さりげなく人を励ますことができるようになりたいと思うことがある。そういう人間にいつになったらなれるのであろうか。そんなことを思いながら、初校を返送する。